Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

第2章 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

木村, 修二 ; 村井, 良介 ; 河島, 真 ; 佐々木, 和子 ; 市澤, 哲 ; 山崎, 善弘 ; 奥村, 弘 ; 井上, 舞 ; 前田, 結城 ; 川内, 淳史 ; 室山, 京子

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,15(平成28年度事業報告書):25-37

(Issue Date)
2017-03-17

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009775

KOBE UNIVERSITY

第2章
歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

包括協定にもとづく灘区との連携事業

1．事業一般

本年度は別に掲げる「鈴木薄荷シンポ」以外に灘区と連携した活動はなされなかった。なお、2017年2月現在の『篠原の昔と今』(2005年度発行)、『水道筋周辺地域のむかし』(2006年度）の残部は共に約300部となっている。わずかにはあったとはいえ郵送による配布依頼は昨年度までと比較してかなり少なかった。これは、従来ヤマト運輸が展開していた「メール便」(A4サイズ厚さ1㎝まで80円、2㎝まで160円）の取り扱いが終了し、日本郵便の「ゆうメール」での発送（150gまで180円、以下重量加算）に切り替えたことにより、発送料金が実質的に上がったことも影響しているかもしれない。

（文責・木村修二）

2．灘区・大学連携事業「ハッカに秘められた巨大商社のDNA ～灘区・鈴木薄荷の過去と今～」

2016年10月26日（水）16:00～17:30、松蔭大学会館3階セミナールームにおいて、神戸大学・神戸市灘区主催、神戸松蔭女子学院大学・鈴木薄荷株式会社・ひょうご神戸プラットフォーム協議会共催、神戸新聞社後援で「ハッカに秘められた巨大商社のDNA ～灘区・鈴木薄荷の過去と今～」が開催された。

灘区には、かつて神戸にあった巨大商社鈴木商店の薄荷事業を引き継ぐ鈴木薄荷株式会社があるが、この鈴木商店についてのトークセッション「ハッカに秘められた巨大商社のDNA ～灘区・鈴木薄荷の過去と今～」と、薄荷の香りを使ったワークショップを行った。トークセッションでは奥村弘・地域連携推進室長（人文学研究科地域連携センター事業責任者）が「巨大商社　鈴木商店と神戸」と題して講演した。

（文責・村井良介）

神戸市との連携事業

1．神戸都市問題研究所・神戸市文書館との連携事業

公益財団法人神戸都市問題研究所・神戸市文書館との間で、2006年度から共同研究「歴史資料の公開に関する研究」を継続して行っている。主な内容は、①神戸市文書館に収集・所蔵される歴史史料の整理、調査、さらに公開、活用のための土台作り、②神戸市文書館の来館者に対するレファレンスサービス（特に古文書の解読)、③毎年秋に開催される企画展への協力､の3つである。③については、本年度、11月6日（日）から11月19日(土)まで神戸開港150年記念企画展「神戸と難民たち」が開催されたが、これには企画段階から参加するとともに展示パネルの一部を作成

した。

また、『新修神戸市史』生活文化編（仮題）の編集・刊行に向けての意見交換を行った。同書については執筆者と目次案が決まった。

（文責・河島真）

2．神戸市企画調整局との震災資料をめぐる連携

神戸都市問題研究所が行っている阪神・淡路大震災関連公文書の整理・活用について、主任研究員杉本和夫氏と神戸大学側から奥村弘・副センター長と佐々木和子とで意見交換をしながら、専門的知識の提供を行っている。本年度は、2016年1月23日に、第6回被災地図書館との情報交換会（於：神戸大学附属図書館）において、「神戸市の震災文書の整理・利用―わかったこと・気づいたこと」と題する報告をいただき、意見交換を行った。

前日の1月22日には、その参加者および学生・教員とともに、兵庫区・長田区の阪神・淡路大震災のあとを巡検し、神戸市立地域人材支援センターで開催された「阪神・淡路大震災関連文書企画展」を見学した。

（文責・佐々木和子）

3．『神戸市文献史料』の編集

神戸市教育委員会と共同で、神戸市立中央図書館所蔵の「神戸村文書」の公開方法の検討、および一部解読の事業を実施した。事業は市澤哲、木村修二が担当した。

（文責・市澤哲）

神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

1．神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

本年度当該事業に関わる主な事項は以下の通りである。

①調査

今年度本事業に関連する新規および継続中の調査はなかった。

②中央区：神戸北野美術館における展示協力

神戸北野美術館での展示は現在も継続している。

（文責・木村修二）

2．神戸大学附属図書館との連携

昨年度に引き続き、人文学研究科院生で日本中世史専攻の山本康司君に文書の整理作業に当たってもらった。まず昨年度終盤より進めてきた「河内国丹南郡伊賀村文書」の整理が11月までに終了したので、近日同館HP上にデータベースが公開される予定である。引き続き、「湯浅家（大黒常是）文書」に着手している。

なお、3月1日に図書館関係者と当センター関係者とで、今年度の活動報告および、次年度の活動方針をめぐって協議を行う予定である。

（文責・木村修二）

一般財団法人住吉学園との連携事業

1．一般事項

住吉歴史資料館において、専門委員として同館の事業推進に関わった。主に住吉村文書中の近世文書を翻刻したが、それ他にも、専念寺所蔵文書の調査を行ったり、『住吉歴史資料館だより』13号に「明和六年、尼崎藩領海岸沿い村々の上知と幕府の意図」を寄稿したりした。

（文責・山﨑善弘）

2．阪神淡路大震災関係聞き取り調査

今年度は、震災資料聞き取りを進めるとともに、『阪神淡路大震災史料集Ⅱ』の発行に向けて編集会議を4回開催し、奥村弘、山﨑善弘、佐々木

和子（地域連携推進室）、水本有香（地域連携センター非常勤）の４名及び住吉歴史資料館館員による原稿を完成させた。2017 年３月末に、『阪神淡路大震災史料集Ⅱ』は刊行予定であり、来年度以降、第３集刊行を目指して、聞き取り事業を継続していく予定である。

（文責・奥村弘）

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005 年１月 26 日に社会文化に関する連携協定を締結し、2014 年１月に更新、さらに 2017 年１月に再度更新した（2020 年１月まで有効）。今年度の事業内容は以下のとおりである。

①小野市好古館「平成 28 年度特別展（地域展）小野市市場地区」展示のための調査に協力するとともに、2017 年１月７日、奥村弘が同館主催の市場公民館での講演会で「豪商近藤家と市場村の近代化－名望家の時代－」との講演を行った。

②地方新聞『新東播』の記事見出し目録について、最終版を作成した。本年３月末、刊行の予定である。

（文責・奥村弘）

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

2005 年３月に朝来郡生野町と締結された協定は、同年４月の市町村合併により朝来市に引き継がれた。以降、おもに市内の古文書の整理・保存・活用にかんする活動を行っている。本年度については、次の事業を行った。

１．民間所在資料の調査・保全

昨年度に引き続き、石川家文書文書および山田家文書の整理を行った。詳細については２を参照されたい。このほか、３の白口（しらくち）調査の際に発見された、個人資料・区所蔵資料について、整理作業および写真撮影を実施し、必要に応じて修復を行った。

また、石川家外蔵文書と山田家文書は、これまで旧奥銀谷（おくがなや）小学校で保管されていたが、2017 年度より、同小学校が外部企業に貸し出されることになったため、2017 年２月 22 日と 25 日に、朝来市教育委員会文化財課、朝来市生野支所とともに、資料の移管作業を実施した。

２．奥銀谷地域における「文化遺産を活かした地域活性化事業」「但馬地域活性化推進事業」への支援

奥銀谷自治協議会では、2014 年度に文化庁の支援（文化芸術振興費援助）「文化財を活かした地域活性化事業）を受け、山田家文書の整理を行ってきた。また、2015 年度より「但馬地域活性化推進事業」の助成を受け、旧生野町域の古文書整理を行うことになった。地域連携センターでは、これを支援する形で、次のような事業に取り組んだ。

①山田家文書整理会への支援

昨年に続き、奥銀谷自治協議会かながせの郷で行われている、山田家文書整理会を支援し、地域住民とともに、月１回のペースで整理を進めている。整理作業で得られた成果のうち、白口にかんする資料は、３の展示にも活用した。

②石川家文書整理会への支援

昨年に引き続き、生野書院で行われている石川家文書整理会を支援し、地域住民とともに、月２回のペースで整理を進めている。また、８月８日・９日には調査合宿を行い、学生と地域住民が協力して、山田家・石川家文書の整理作業を行った。

３．生野町白口地区の地域調査

朝来市生野町白口は、かつて鉱山の中心地として栄えていたが、現在は過疎化が進んでおり、地域の歴史を継承していくことが難しくなっている。そこで、現状の白口に残る景観や人々の記憶を記録するために、2016年11月から2017年1月にかけて、現地調査と地域住民からの聞き取り調査を実施した。この調査で得られた成果について、「白口いま、むかし」（於かながせの郷、会期：2017年3月4日（土）～20日（月・祝））と題した展示を行った。また、会期中3月11日から15日にかけて、奥銀谷地域住民から聞き取りを行ったほか、整理作業の実演会を実施した。

4．地域資料活用にかかる支援

生野公民館が主催している生野歴史文化講座では、今年度、石川家文書に残された献立帳を利用した連続講座が企画された（全5回）。このうち、6月14日の第4回講座では、献立帳をテキストとした古文書講座が開催され、室山京子（神戸大学非常勤）が講師をつとめた。

（文責・井上舞）

丹波市との連携事業

丹波市とは2007（平成19）年以来連携事業を継続している。本年度の事業内容は以下の通り。

1．連続講座の開催

昨年度に引き続き、歴史講座（以下、連続講座）を開催した。今回は全体テーマを「地域の歴史遺産から学ぶわたしたちの丹波史」と改名したうえ、以下の日程で行った。

第1回2016年9月17日（土）前田結城「丹波の一青年教師が見た日清戦争」於ライフピアいちじま

第2回10月15日（土）前田結城「近世の争論、ねじれる村々の連帯―郷・組合・同領結合―」於春日住民センター

第3回12月3日（土）西岡真理「丹波市域の遺跡出土土器について」於山南住民センター

第4回2017年1月21日（土）川内淳史「市史編さんとまちづくり」於青垣住民センター

本年度は第3回に丹波市教育委員会より西岡氏が登壇し、発掘調査の成果にもとづく報告が行われた。考古学を題材とした講座は初めてのことであり、本事業がカバーする素材の幅の広さを市民に知っていただけたように思う。また第4回には川内氏より市史編さん事業とまちづくりの連動させることの今日的意義について報告があった。当日は大雪の関係もあり来場者数は大きく伸びなかったが、来場者は他市の実践例から少なからぬ啓発を受けた模様である。

また、講座の際に回収されるアンケートの結果はおおむね好意的であり、事業の充実・継続を望む意見が大半であった。

2．地域活性化を目的とした調査・イベント等の実施

本年度は歴史文化にもとづく地域活性化事業の一環として、春日町棚原地区と氷上町氷上地区を重点的に、下記の通り訪問した。

- 2016年4月15日（金）【春日町棚原】連携10周年を記念する冊子の編集会議（以下「連携10周年記念誌会議」と略記）　於棚原公民館
- 5月13日（金）【氷上町氷上】氷上区有文書目録の校正作業　於氷上公民館
- 5月20日（金）【春日町棚原】連携10周年記念誌会議　於棚原公民館
- 7月9～10日（土～日）【氷上町氷上】氷上区有文書の全点ラベル張り作業　於氷上公民館
- 9月6日（火）【氷上町氷上】氷上区有文書展示会に向けての準備　於氷上公民館
- 11月5日（土）【氷上町氷上】区有文書展示会の準備　於氷上公民館
- 11月6日（日）【氷上町氷上】氷上区有文書展示会・記念講演会「史料が語る氷上の歴史」於

氷上公民館
・11 月 22 日（火）【氷上町氷上】氷上町氷上区有文書展示会・記念講演会の反省会　於氷上公民館
・2017 年 1 月 14 日（土）【春日町棚原】連携 10 周年記念誌会議　於棚原公民館
・1 月 15 日（日）【氷上町氷上】地域連携協議会における報告の予行練習及び大字史編さんに向けての古文書勉強会
・2 月 25 日（土）【春日町棚原】連携 10 周年記念誌会議　於棚原公民館
・2 月 26 日（日）【氷上町氷上】氷上区有文書の撮影作業及び古文書勉強会

上記の成果のうち特筆すべきものは、2016 年 11 月 6 日に開催された氷上区有文書展示会・記念講演会「史料が語る氷上の歴史」である。展示会には約 60 名の来場者を得た。また当日は午前中に氷上古文書同好会の会員による現地フィールドワークが行われ参加者は 25 名、午後に開催された記念講演会「区有文書が開く『氷上史』の扉」（講師前田結城）には 45 名の参加者を得た。なお展示会・記念講演会の様子は 2016 年 11 月 13 日付の丹波新聞でも紹介された。

棚原地区、氷上地区ともに、「大字史（誌）」の刊行にむけて目下事業を進行中である。大字史編さん事業を地域活性化事業の一環として位置づけつつ、来年度以降も継続的に両地区を訪問し、事業にとりくんでいきたい。

3．その他イベントの開催

・2017 年 2 月 28 日（火）～ 3 月 20 日（月祝）ミニ企画展「上山家文書にみる幕末維新の丹波」於丹波市立柏原歴史民俗資料館
・2017 年 3 月 4 日（土）上記企画展と連動した記念講演、前田結城「上山家文書にみる幕末維新の丹波」 於たんば黎明館

4．刊行物その他

①『氷上区有文書の世界―目録と解説―』（2016 年 11 月）A4 版、78 頁

氷上区有文書の調査報告および史料解説と目録。氷上地区全戸に配布し、残部を希望する市民に頒布した。

②『丹波市オンデマンド史料叢書 2　上山治郎右衛門 幕末用状控帳』（2017 年 3 月）B5 版、105 頁

上山氏所蔵、丹波市立柏原歴史民俗資料館寄託文書のうち、幕末期の上山治郎右衛門筆用状控帳を翻刻し、史料解説と合わせて刊行。200 部を製本し、その他を丹波市教育委員会 HP 上にアップした。

③『広報たんば』へのコラム寄稿

「シリーズふるさとを見直そう」に毎月コラムを寄稿した。

（文責・前田結城）

5．丹波古文書倶楽部への協力

本年度も毎月第 2 土曜日に丹波市内の住民センターを会場に例会が開催され（8 月・11 月・2 月は休会）、木村がチューターを務めた。また、12 月 18 日の例会の後には、同市内においてフィールドワークが開催され、松下正和氏（姫路大学）および木村がアドバイザーとして参加した。

（文責・木村修二）

連携協定にもとづく加西市との共同事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009 年 5 月 16 日に締結された。これにもとづき、本年度は次のような事業を行った。

1．青野原俘虜収容所にかんする研究成果のドイツ語翻訳

第一次世界大戦中に加西市に設置された青野原俘虜収容所については、当初小野市好古館と

の事業のなかで、写真資料の調査が行われてきた。2012 年以降は加西市立図書館郷土資料係と、2015 年度からは市教育委員会生涯学習課市史文化財係と共同調査が行われるようになった。2015 年度は、青野原俘虜収容書の開設 100 周年にあわせて、さまざまな企画が開催され、その中で、これまでの調査・研究成果をまとめた『加西に捕虜がいた頃―青野原収容所と世界―』を発行した。2016 年度は、この成果を海外にも発信するため、同書のドイツ語訳版の作成にとりくんだ。編集作業は石井大輔(神戸大学非常勤)が行った。完成したドイツ語訳版は、次年度以降にホームページ上での公開が予定されている。

2．加西市北条町小谷の地域調査

2015 年度に、加西市教育委員会より連絡が入り、加西市小谷地区の歴史文化調査にかんする協力要請があった。これを受けて、2016 年 7 月より、同地区にかんする調査を開始した。今年度は、地域資料の調査・整理と聞き取り調査を実施した。地域資料については、石橋知之（大学院生)・跡部史浩（学部生）が、小谷区区有文書の全点撮影し、必要に応じて中性紙封筒への移し替え等を行った。また、2016 年 11 月 24 日と 12 月 1 日に、小谷区の協力を得て、加西市教育委員会とともに、井上舞が地域の聞き取り調査を行った。本調査は来年度も継続して行われる予定である。

（文責・井上舞）

尼崎市における連携事業

2016 年 10 月に刊行された『たどる調べる尼崎の歴史』の編集執筆に、古市晃、市澤哲、村井良介が協力した。また、市澤は尼崎市立地域研究史料館の専門委員として、同館の運営に協力した。

2016 年 1 月、尼崎市教育委員会の主催で開催された「歴史遺産保存活用シンポジウム」のコーディネーターを市澤が務めた。

2017 年 2 月の尼崎市富松地区の「富松まちづくり委員会」の 15 周年記念行事における尼崎市長との対談に市澤が参加する予定。

（文責・市澤哲）

三木市での連携事業

1．三木市史編さん支援事業

昨年度より三木市教育委員会教育企画部文化スポーツ振興課市史編さんグループにおいて進められている新三木市史編さん事業について、今年度も「受託型協力研究」として特命教員を派遣した。事業が開始された一昨年度来、市側と協力して新三木市史編さんに向けての指針作成等を進めてきたが、9 月 16 日に開催された「第一回三木市史編さん委員会」において「三木市史編さん基本計画」が承認され、市史編さんに向けた基本方針が定められた。また今年度は「第一回通史編専門委員会」（1 月 6 日）および「第一回地域編専門委員会」（12 月 22 日）を開催し、通史編・地域編それぞれの具体的な編さん事業を開始する準備を整えた。また 2 月 17 日に開催された第二回編さん委員会では書名の審議が行われ、結果、『新三木市史』を編さん委員会案として市に提案することになり、市での審議を経て決定される運びである。

上記の動きを受けて、2 月 9 日には吉川町公民館において「第一回吉川部会」を開催し、地域編の編さんに向けた具体的動きをスタートした。今後は月一回程度の開催を継続していくとともに、来年度からは時代別･分野別部会をスタートさせ、通史編の編さんに向けて進めていく予定である。

その他の作業としては、今年度から三木市において雇用された「市史専門員」2 名および「市史

編さんボランティア」を中心として、市内自治会や旧家における史料調査・整理を実施するとともに、その成果の一端を示すため、2月11日から3月26日まで、三木市立みき歴史資料館企画展として「地域の史料たち－みんなが主役の市史編さん－」と題する市史編さん企画展を実施した。関連企画として2月26日には大槻守氏（香寺町史研究室）による「市民が主役の自治体史」と題する講演会、また3月18日にはワークショップ「市史編さん体験－古文書を触ろう－」が開催される予定である。

また大学教育と市史編さん事業の連携として、12月7日には佐々木祐・人文学研究科准教授および文学部社会学教室の学生・院生による三木市内のフィールドワークが実施されたほか、2月17日～18日には昨年に引き続き旧玉置家住宅において神戸大学古文書合宿が開催されるなど、大学教育と市史編さん事業との連携活動も進んでいる。

市史編さん事業に関わる今年度の刊行物としては、『市史編さんだより』の2号（12月20日）、3号（3月31日発行予定）および、昨年度発行した市史編さん紀要『市史研究みき』第1号に続く第2号（3月31日発行予定）がある。

2．商工観光課との連携事業

2010年度より文化庁の地域伝統文化総合活性化事業（「三木市文化遺産総合活用活性化事業」）として、市民グループ「旧玉置家住宅文書保存会」による襖下張り文書保存活動が行われたが、事業終了後も市民グループ主体の活動が維持され、三木市商工観光課とともに同会の活動支援を実施している。2月15日に同会および三木市商工観光課との協議が行われ、来年度は旧玉置家襖下張り文書の活用に向けた取り組みを強化する方向で進めていくことが確認され、目録の発行および活用に向けた資料の整理が行われる予定である。

3. 三木市立みき歴史資料館

今年度5月に、三木市における歴史文化の拠点となるべく開館した「三木市立みき歴史資料館」の事業について、館長の諮問機関である「みき歴史資料館協議会」の委員（会長）として参画し、同館の運営等に関わる助言を行った。

また、5月22日に開催された同館主催の歴史講座において「市史編さんとまちづくり」と題する講演を行い、市民に対する市史編さん事業の啓発活動に協力した。

（文責・川内淳史）

三田市との連携事業

本年度は幕末維新期の三田藩の藩政改革・廃藩置県に関する一次史料の調査と分析に重点を置いた。具体的には、旧三田藩主九鬼家資料のうち、明治初年に福沢諭吉からの改革助言を受けたことに関する諸書簡の稿本の翻刻と、慶應義塾福澤研究センターに所蔵されている藩主九鬼氏宛の福沢諭吉書簡の調査を行った。これらの調査・研究をベースとして、来年度以降は幕末維新期の三田藩関係史料の編さん・刊行にむけて取り組みを継続したい。

（文責・前田結城）

篠山市との連携事業

1．篠山市立中央図書館資料整理サポーターの活動支援

本活動は、2013年から篠山市立中央図書館を会場として行われている。本年度は2017年2月29日現在で、2016年6月19日（日）、7月18日（月・祝）、9月19日（月・祝）、10月23日（日）、

11 月 20 日（日）の計 5 回開催された。主な活動内容は『丹南町史』編纂資料の目録作成であるが、本年度からは史料翻刻など新たな活動を展開している。整理活動自体から、その成果を順次アウトプットする局面へ移行しつつあるが、今後もこのような活動への協力を続けていきたい。

2．「古文書合宿」への協力

文学部「地域歴史遺産保全活用演習」および人文学研究科「地域歴史遺産保全〔企画〕演習」等の授業が、農学部篠山フィールドステーションにおいて、9 月 12 ～ 14（月～水）の 2 泊 3 日で実施された。本年度は「中西啓勝家文書」の目録カードの再確認及び訂正作業を中心に、史料整理実習が行われた。最終日には史料整理法について学生間で活発な議論が行われた。

3．「中西啓勝家文書」の貸出と活用

同文書に含まれている「縞帳」を「名もなきアーティスト達の縞　丹波木綿」（2016 年 10 月 14 ～ 17 日、於里山工房くもべ）という地域イベントに出品するため貸出をした。

4．「第 11 回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム」での活動報告

上記フォーラムにて 2016 年度における人文学研究科の篠山市での活動報告を行った。開催日は 2017 年 1 月 21 日（土）、会場はハートピアセンターであった。

（文責・前田結城）

明石市との連携事業

1．「明石藩関連資料調査・公開業務委託」（平成 28 年度）

①「明石藩の世界Ⅳ」展への参画

2016 年 9 月 17 日 (土）から 10 月 16 日（日）まで、明石市立文化博物館において、企画展「明石藩の世界Ⅳ」が開催された。本展は、2013 年度より開催されている「明石藩の世界」展の第 4 回という位置づけであり、サブタイトルを「藩領の村々と大庄屋」とした。

昨年度同様、明石市と明石文化博物館と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが主催となったが、神大は主に展示の立案・構成を担当した。

今回の展示では、昨年度明石市に寄贈された松平家文書Ⅱから領知朱印状・領知目録、同館蔵の播磨国絵図など図像資料も展示するなどして、播磨国と美作国に展開していた明石藩の領分の範囲や変遷について展示した。また今年度調査が実現した文書群から明石藩領大庄屋に関するものを選び、速報的に紹介するとともに、大庄屋制について解説した。さらに同館所蔵黒田家資料から金属工芸品を選んで展示した。

本年度の展示会でも、展示図録が製作され、展示品解説・翻刻・解説論文（木村修二「明石藩の領分支配と大庄屋」）を当センターが担当した（一部を除く）。

展示会期間中は、センター研究員（木村）によるギャラリートークを定期的に実施した（9/22、9/29、10/6、10/13）。展示会観覧者（入館者）は期間中 2421 名（博物館調べ）であった。

10 月 1 日には、記念講演会が開催され、明石藩領についての知見をもつ大国正美氏（神戸深江生活文化史料館長）と加納亜由子氏（明石市立文化博物館学芸員）が講演を担当した。参加者数 60 名。講演会終了後には、講演参加者の有志を対象に展示会場でのギャラリートークも実施し、木村、前田がそれぞれの担当コーナーにおいて解説を行った。

また、本展との連携イベントとして、9 月 24 日に同館において明石葵会主催「シンポジウム『絵図･文書からみた明石城』」が開催され、パネラーとして木村が参加し、「古文書の中の近世明石城―史料の紹介を兼ねて―」と題した報告を行った

（参加 53 名）。

（文責・木村修二）

②第 5 回企画展関連の活動

第 5 回の企画展は「明石藩の世界Ⅴ―明石藩の幕末維新―」と題して 2017 年 9 月 16 日から 10 月 22 日（日）にかけて開催される予定である。それに向けての打合せが2016年11月29日（火）、12 月 27 日（火）、2017 年 2 月 22 日（水）の計 3 回、明石市立文化博物館において行われた。また企画展に関連する旧明石藩士関係史料の調査が、2017 日 2 月 3 日（金）大山家にて行われた。

（文責・前田結城）

2．明石市における地域史料の調査研究

本年度は、「文化遺産を活かした地域活性化事業」への参加・協力を中心に事業が展開した。同事業では年度末に『明石の宿場―むかし・いま―』の刊行にむけて、近世期に宿場町であった大久保地区の旧家文書調査を下記の通り行った。

・2016 年 11 月 25 日（金）橋本家文書調査
・2017 年 2 月 1 日（水）安藤家文書調査
・3 月 16 ～ 17 日（木～金）安藤家文書の整理作業

これらの文書の分析は目下進行中であるが、大久保地区の近世～近代の町政から近世期における宿駅機能が具体的に把握しうることが期待できる。

なお、上記の『明石の宿場』刊行記念として次のイベントが開催された。

・2017 年 3 月 12 日（日）現地報告会「大久保の宿場～平成 28 年度調査から～」 於大久保小学校区コミュニティ・センター会議室
・3 月 19 日（日）現地探訪会

これらの地域イベントを通じて、市史編さん事業への市民の理解と協力を拡げていけるよう努めていきたい。

（文責・前田結城）

たつの市域をめぐる連携活動

神戸大学近世地域史研究会

神戸大学近世地域史研究会は、これまでのとおり原則月 1 回日曜日に開催している。構成メンバーは、阪神地域・播磨地域・大阪府内在住の 20 名弱の市民の方々で、主な活動は古文書翻刻作業のための読み合わせである。今年度は、昨年度から行っていた姫路市立城郭研究室所蔵「播州国中並隣国見聞之覚書」の読み合わせを 9 月に終え、その後はたつの市龍野町の善龍寺所蔵史料の翻刻に取り組んでいる。同寺所蔵史料は、2015 年に本研究会が 5 回にわたり調査したもので、2016 年 10 月に最終の現地確認調査を行い目録作成が終了した。

同研究会では割り振られた担当箇所を発表する形をとっており、報告担当者は翻刻文を読みあげるだけでなく、内容を理解するため語句や関連文献を調べて発表を行う。参加者は疑問や質問など自由に発言し、時には白熱した議論となる場合もある。今後も学生への参加の呼びかけを行い、世代間交流を生み出す学びの場となるような会にしたいと考えている。

なお、既刊『「覩聞記」の世界』（一）（二）の最終巻となる（三）の発行に向けて編集作業を進め、まもなく発行する予定である。

（文責・室山京子）

姫路市香寺町での連携事業

1．「平成 28 年度姫路市提案型協働事業」への協力

香寺歴史研究会は、本年度、「平成 28 年度姫路市提案型協働事業」に採択された。事業名称は「地域の力で地域史料を保存継承する」である。この事業の一環として、香寺歴史研究会の主催により「地域資料保全研究会」が開催され、そこでは前田結城と川内淳史が講師として招かれた。講演内容は以下の通り。

2016 年 7 月 20 日（水）「地域史料保全研修会」於犬飼公民館　約 40 名参加

①史料の保全について　前田（50 分）

②市公文書の整理について　石田義郎（姫路市職員）（20 分）

③現代文書の整理について　川内淳史（50 分）

２．大字誌を読む会の実施

昨年度まで「香寺町史を読む会」が年 6 回開催されてきたが、本年度は、近年の大字誌刊行の実績の蓄積をふまえ、「大字誌を読む会」と改題して連続の勉強会を行った。本年度は土師地区の大字誌を大槻守氏、相坂地区の大字誌を前田が担当して講読をした。開催日程・回数は、2016 年 7 月 26 日（火）、8 月 30 日（火）、9 月 27 日（火）、10 月 25 日（火）、12 月 20 日（火）の計 5 回、会場は香呂・香呂南地区県民交流会館であった。

（文責・前田結城）

佐用町との連携事業

利神城を国指定史跡とするための調査事業に、市澤、村井が委員として参加し、指定のための調査書作成に協力した。

（文責・市澤哲）

福崎町との連携事業

福崎町とは、2009 年度より共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」を開始した。本年度については、以下の事業を行った。

１．松岡鼎関連資料の調査

昨年度に引き、松岡鼎がコレクションしていた絵葉書の整理作業を実施した。昨年度写真撮影を行ったデータを用い、目録を作成した。目録については、絵葉書資料目録（松岡鼎の絵葉書コレクションとしての目録）と、書簡葉書目録（コレクションされた絵葉書のうち、書簡として使用された葉書の目録）の 2 種類を作成した。また、一連の調査については、（2）の井上通泰展や『広報ふくさき』2017 年 3 月号において、成果を還元した。

２．井上通泰関連資料の調査、および記念展への協力

柳田國男・松岡家記念館では、今年度井上通泰生誕 150 年にあわせて、記念展「井上通泰―歌を詠み愛した眼科医」（会期：2016 年 7 月 23 日～ 2016 年 11 月 27 日）を開催した。地域連携センターでは、この展示への協力として、井上通泰関連の資料調査、展示資料の選定・解説に取り組んだ。また、成果還元の一環として、2016 年 11 月 5 日に、福崎町立神崎郡歴史民俗資料館企画の連続講座において、井上舞が「井上通泰と南天荘同人会」と題した講演を行った。

３．調査の成果還元

①『広報ふくさき』への寄稿

これまでの調査成果について、地域住民に広く還元するため、福崎町の広報誌『広報ふくさき』

誌上において、「松岡五兄弟」シリーズを寄稿した（掲載月：2016 年 5 月～ 9 月、10 月～ 2017 年 1 月、3 月）

②『故郷七十年』散策マップの作成

これまでの研究成果及び柳田國男の著作『故郷七十年』を素材として、福崎町辻川界隈を中心とした散策マップを作成中で、3 月に発行予定である。

③成果報告書の作成

今年度の調査成果をまとめた報告書を、年度末に発行予定である。

（文責・井上舞）

猪名川町における連携活動

1．猪名川町における多田院御家人関係文書調査

平成 26 年度より兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会を中心に、兵庫県立歴史博物館、関西大学文学部古文書室、猪名川町教育委員会、および当センターが加わって、猪名川町域に所在する旧多田院御家人の系譜をひく家々の所蔵文書調査を続けてきた。

本年度も昨年度同様の体制で、同町島地区の平尾家所蔵の文書を主な対象とし、特に同家所蔵の中世文書（写）を中心に調査・分析を行うこととなった。

平尾家への調査は昨年度 8 月に 1 回目の調査を実施していたが、今年度も 8 月 23 日に、藪田貫氏（兵庫県立歴史博物館長）をはじめとするメンバーで同家を訪問し、『猪名川町史』編纂時に「平尾智彦文書」として調査された文書群と、同じく「粟野文書」（平尾家の出身で郷土史家の粟野頼之祐の家名義）として調査された元々同一の文書群の整理、および写真撮影を行った。

2 回目の調査実施は 12 月 5 日までずれ込んでしまったが、整理と撮影を行った。なお、木村は、12 月 17 日に単独で文書撮影に猪名川町へ赴いている。

以降は、成果の取りまとめを各担当者が行うとともに、1 月末より開催される展示会へむけた準備が進められた。今年度の展示は、平尾家文書と多田院御家人との関係性を勘案して、平尾家の本姓ともいえる「六瀬家」をテーマとして、中世における六瀬家を中心に展示を構成することとなった。また、粟野頼之祐が戦後発行していた地域新聞「宝塚新報」「北摂郷土史学新聞」についても展示することとした。ディスプレイ作業は 1 月 30 日に実施した。

展示会は、「多田院御家人の家～ Part Ⅲ六瀬家～」として、1 月 31 日 (火) から開催されている（2 月 26 日まで）。展示期間中の 2 月 8 日には展示制作担当者によるギャラリートークが開催された。

なお次年度の本事業は最終年度として、過去 3 年にわたって実施してきた調査成果の総括を行うこととなっている。

2．猪名川町文化財審議委員会

木村が委嘱されている猪名川町文化財審議委員会の本年度の第 1 回委員会は 6 月 29 日に猪名川町役場第 2 庁舎委員会室で開催され（以下会場同じ）、本年度の文化財事業計画などが審議された。本年度より新たに 2 名の委員が委嘱された（建築部門・美術部門）。第 2 回は、12 月 22 日に開催された。この日は、これまで不十分だった猪名川町の文化財の取り扱いに関する新たな要綱を策定するにあたり、委員がそれぞれ意見を述べ合った。第 3 回は 3 月中に予定されている。

3．「猪名川の古文書を楽しむ会」への協力

昨年度まで猪名川町中央公民館主催歴史講座として位置づけられていた古文書講座が終了し、今年度は同講座に参加していた受講者の中から有志を募り、自主運営による「猪名川の古文書を楽しむ会」として新たに再出発することとなった。チューターは、引き続き木村が務めること

となったが、世話人は参加者の中から有志が務め、会費徴収や会場費支出などの出納を担当されている。なお、テキストについては、猪名川町内にこだわらず他地域のものも取り扱ってゆく方針である。本会は、次年度も継続予定である。

（文責・木村修二）

協定に基づく西脇市との連携事業

西脇小学校は、約 80 年前に建設され、県景観形成重要建造物に指定されている木造校舎である。改築ではなく、建築当時の姿を残しながら教育環境を改善したいとの市民からの要望を受け、西脇市は、神戸大学と一緒に現在改修に向けた事業を展開している。

１．西脇市郷土資料館での史料調査

西脇小学校誕生の背景となる西脇市の歴史的背景をさぐるため、8 月 11 日・12 日の 2 日間、西脇市郷土資料館所蔵史料の調査を行った。参加者は学生・院生・教員を含め、13 人。最終日には、西脇市長や教育長などが参加する調査概要報告会を行った。

２．西脇小校舎改修基本計画・基本設計 経過報告会への参加

改修経過を市民に報告する「西脇小校舎改修基本計画・基本設計 経過報告会」が、2016 年 5 月 15 日と 11 月 23 日の 2 回、市生活文化総合センターであった。2 回目の 11 月 23 日には、8 月に行った西脇市郷土資料館での史料調査の成果を奥村弘副センター長と大学院生の松本充弘が市民向けに報告した。

（文責・佐々木和子）

加古川市における調査・研究活動

稲岡鉄工株式会社に保管されている稲岡工業株式会社文書の調査・研究を、市民ボランティアとともに行った。

また、大西尚平家所蔵の大西甚一平家文書については、調査・研究を進めるとともに、保管場所の確保が困難となったため、大西氏の要請により、三木市と歴史資料ネットワークの協力を得てレスキューを行い、現在、みき歴史資料館にて保管されている。

（文責・山﨑善弘）

大学協定に基づく大分県中津市との連携事業

大分県中津市は神戸大学の前身である神戸高等商業学校初代校長である水島銕也の生誕の地であり、神戸大学のゆかりの地である。2014 年 5 月に中津市で開催された水島校長生誕 150 年記念講演会をきっかけに、交流がはじまった。2015 年 7 月には、中津市監修による『マンガ明治・大正期の教育者　水島銕也』(梓書院)が出版され、本学文書史料室が資料提供を行うなど関係が築かれてきた。

これらの経緯を踏まえ、神戸大学の理念を語り継いでいくため、2016 年度、中津市との間で大学協定を締結した。協定内容のうち「地域の歴史と文化に関すること」の一環として、奥村弘（地域連携副センター長）が同市の「新歴史民俗資料館（仮称)」建設について、外部委員として専門家の立場から教育委員会と意見交換を行った。

（文責・村井良介）

協定に基づく人間文化研究機構（国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館）との連携事業

2016 年 3 月 16 日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館と人文学研究科との間で学術交流に関する協定を締結（後掲 P50 参考資料参照）し、それに基づき 11 月 13 日に歴史民俗博物館共同研究「総合資料学の創成」第２回ワークショップを神戸大学大学院人文学研究科で行った。

報告は以下のとおりである。報告１：高橋京子氏（大阪大学総合学術博物館・同大学院薬学研究科）「地域文化力と薬草栽培の叡智：森野旧薬園から発信する生薬国産化のキーテクノロジー」、報告２：荒木和憲氏（国立歴史民俗博物館）「総合資料学と「文献史学」―中世日本国際交流史研究の立場からー」。

また 7 月 15 日、人文学研究科と大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館との間で、学術交流に関する協定を締結（後掲 P51 参考資料参照）し、共同研究を開始した。 さらに人間文化研究機構との間で地域歴史資料の保全と活用についての学術協定締結に向けて、協議を重ねている。

（文責・奥村弘）